

## V 制作者は演出手法をどう認識したか ―― 「誤解」と「行き過ぎ」

上記の制作経緯からも明らかなように、制作者は「オセロ中島騒動」を番組の中心テーマに据えながら、当のオセロ中島とI占い師を欠いたまま番組を成り立たせなければならなかった。

出演を了承してもらったS占い師はこの2人とまったく無関係というわけではなかったが、注目を集めている「騒動」の当事者ではなく、知名度や話題性の面でも比較にならないことはわかっていた。とはいえ収録の場で彼女が語った話はそれなりに面白く、内容のあるものだった。

報告書はこの段階で制作現場で考えられたこととして、「登場するゲストがS占い師とは特定出来ない告知スーパーやQショットを多用するという手法が、総合演出により創出されました」と説明している。これがつまり、謎のI占い師が出演する、と視聴者の期待を煽り、引っぱりながら、実際にはS占い師を登場させる演出手法であった。

制作者はこの間の経緯を、「誤解」と「行き過ぎ」という言葉をたびたび使って、次のように説明している。

例えば、「(I占い師がスタジオに登場する、と)もし誤解を生じる人がいても、番組を見て頂くことで(中略)受け入れてもらえると考えていた」「もし誤解して番組を見た方がいたとしても、番組を見ていただければ、(中略)必ず満足していただけるはずだと確信していた」等々とある。報告書中、このような文脈で使われる「誤解」は18回登場する。

だが、「(心底1人でも多くの視聴者に楽しんでもらおうという)思いが強すぎて行き過ぎてしまった」「見てもらうに値する番組を制作し、なるべく多くの人に見てもらいたいという熱い思いが行き過ぎ、本末転倒の結果を生んでしまいました」。報告書には、同趣旨の「過度の演出」等を含めると、「行き過ぎ」を表わす言葉が10回以上出てくる。